



Title	近世における京の漆器業の発展と象彦：江戸時代後期から幕末期までの歴代西村彦兵衛の業績
Author(s)	星野, 祥子
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 7-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世における京の漆器業の発展と象彦

— 江戸時代後期から幕末期までの歴代西村彦兵衛の業績

星野祥子

キーワード

近世漆工史, 近代漆工史, 京漆器, 産業, 商家
Lacquerware in the period of Edo, Lacquerware of modern Japan,
Lacquerware of Kyoto style, Industry, Merchant

はじめに

1. 象彦に関する先行研究
 2. 西村家所蔵の家伝史料について
 3. 象彦に関する文献資料について
 4. 創業家から西村家への家督継承
 5. 幕末までの歴代西村彦兵衛の経歴と業績
- おわりに

はじめに

株式会社象彦は1661年（寛文元年）に象牙屋として創業し、18世紀半ばから漆器製造業で知られるようになった京都の老舗企業である。19世紀初め、三代西村彦兵衛の蒔絵の技術が評判となり宮中への出入りを許されて以来、現在に至るまで京都を代表する老舗の漆器商として知られている。「象彦」の名は、象牙屋の「象」と西村彦兵衛の「彦」をとったものであり、明治時代から使用されている屋号である。

筆者は、十代西村彦兵衛であり株式会社象彦 代表取締役社長を務める西村毅氏からの協力を得て、象彦の創業から現代にかけての歴史・漆器生産・漆器デザインの研究を進めている。研究の目的は、象彦の歴史と西村彦兵衛の経歴をまとめることで、京の漆器業の一端を明らかにすることである。

京の漆器業は室町時代頃から発展したとされ、公家や武家、大商家や神社仏閣など、いわゆる上流階級の需要を満たすための優雅な蒔絵を特徴のひとつとしてきた。桃山時代から江戸初期にかけては、高台寺蒔絵という黒漆の地に金の平蒔絵で秋草などの模様をあらわす技法が現れるが、この技法を手掛けたとされ室町時代から続く京都の蒔絵師である幸阿彌家は徳川幕府の成立と共に江戸に本拠を移し、大名の婚礼調度の蒔絵装飾などに仕事をひろげて

本稿は、第66回意匠学会大会（2024年8月23日、上田市交流文化芸術センター）での発表にもとづく。

いく。江戸時代における京都発の漆作家として広く知られているのは、本阿弥光悦や尾形光琳といった文化人である。日本文学への深い造詣を元に、漆器に限らず様々な工芸品に形象化した意匠を表した¹。そのような中、京の町の蒔絵師や塗師の名が見られるようになるのは、江戸中期の17世紀以降、京都の観光案内書である『京羽二重』に住所と共に紹介されるようになってからである。やがて一部の職人は自らの名を作品に記し始め²、中村宗哲³、近藤道恵⁴、永田友治⁵、塩見政誠⁶、佐野長寛⁷などの数多くの名工が漆工史上に現れてくることになる。

このように京の漆器業を取り巻く業種として、世襲の御用蒔絵師や文化人、町の名工が見られるが、象彦のような漆器商の存在も忘れてはならない。江戸後期に発刊された『京都買物独案内』には「蒔絵師」や「塗師」の他に「漆器道具仕入所」と記されるように、経済の伸長によって町人の間にも広く漆器が普及したことから漆器商が登場するようになる。漆器商は、注文主の要望を把握した上で蒔絵師や塗師を統括し漆器制作のプロデュースを行い、漆器の販売を行った。当主は幅広い知識と教養が求められ、職人たちに的確な指示をしなければならず、プロデュース力の高い漆器商により数々の名品が生み出されてきた。

江戸時代から明治維新を越えて続いた大店としては、美濃屋と象彦が代表される。美濃屋の初代は1772年（安永元年）に生まれ、美濃屋宗助家より独立し、寺町錦小路に店舗を開く。初代から七代まで代々稲垣孫兵衛を名乗った。明治時代には万国博覧会、新古美術品店などで多数受賞を重ね宮内省御用達となるが、昭和20年に廃業し、残された良質の作品群は京都国立博物館に「漆器老舗美濃屋保存資料」として寄贈されている⁸。

一方、象彦は1661年（寛文元年）に安井七兵衛（生年未詳-1692）が象牙屋と称し、唐物商から始業する。やがて別家の西村彦兵衛が後継し、江戸後期には仙洞御所の御用を務めるまでになる。明治時代に入ると、茶道の家元や数寄者のお好み道具、財閥家などの上層階級向けの食器、調度品、家具といった多様な製品を製造販売し隆盛を極めた。歴代当主の中で最も成功を収めたとされる八代西村彦兵衛（1887-1965、継承1932年）は、漆器の海外輸出に着手し「漆器貿易の先駆者」と呼ばれ、京都蒔絵美術学校を設立し後進の育成にも尽力したとされ、現在に至る。

このように、江戸時代に京の町の漆器商として発展し、明治維新前後の漆器業界の混乱期を経て、現在に至るまで家業を継承し続けているのは象彦を残すのみであり、江戸時代後期以降の京漆器の発展と展開という意味において、重要な役割を果たしてきたと考えられる。京都発の漆器の名品が、ある時代の一人の天才や名家により作られただけでなく、京の町における注文主や職人たちとの共同作業の中で作り続けられてきたのだとしたら、創業から八代へ至る象彦の発展の実態は、京という地域の漆器業の実態をそのまま表すのではないか。こ

のような問いから、本研究は、西村家所蔵の家伝史料を調査することで、象彦の歴史と西村彦兵衛の経歴をできるだけ詳細にまとめようとするものである。本論では、象彦が隆盛を極めた明治時代の事前調査として、調査範囲を江戸時代から幕末まで、つまり象彦の前身である象牙屋の創業から西村彦兵衛の初代から四代までの期間と定め、先行研究調査と西村家所蔵の家伝史料調査及び文献調査を行なった。

1. 象彦に関する先行研究

まずは先行研究であるが、象彦の歴史や製品の研究は進んでいるとは言えない。先行研究としては、1984年の足立正男氏による「象彦家の歴史と経営哲学」が最初である⁹。足立氏は日本経済史が専門であり、1974年の『老舗と家訓』（東洋文化社）に於いて、京都の有力商人の家訓を分析し近世における京都の伝統的生活理念をまとめているが、この中に西村彦兵衛の「家訓」が多く引用されている。京都の経済史という観点から西村家の家訓が調査されるうちに、象彦こと西村彦兵衛の歴史がまとまり始めたようである。

工芸史や意匠に関わる象彦の研究や展覧会は、管見の限り、1983年にMOA美術館にて開催された『近代日本の漆工藝展』が最初である。この展覧会は、幕末から明治・大正期にかけて活躍した主要な漆工の作品88点を陳列し、近代における日本の漆工藝の発展を概観しようとする展覧会であった。そこでは七代西村彦兵衛の作品が1点、八代西村彦兵衛の作品3点が展示された。展覧会を契機に編纂された画集『近代日本の漆工藝』（1985年、京都書院）では、出展作品以外に同時代の作品が多く掲載され、全121点がカラー図版で掲載されている。西村彦兵衛の作品は、前述の展覧会の出展作品に加え、八代の作品1点が追加されている。また、同時期に『京の伝統と文様 8京漆器／象彦』（1984年、美の美社）が発刊され、ここには36点の作品と66点の蒔絵の下絵である置目がカラー図版で掲載されている。惜しむらくは、この書籍には作品解説が載っておらず、各作品が何代の製作であるか判別されないことである。このように、1980年代は日本の近代漆工史が纏められ始めた時代であり、象彦と西村彦兵衛の名もその中に列挙されたのである。

象彦を主題にした初めての大規模な展覧会として注目すべきは、2011年の三井記念美術館による企画展『特別展 華麗なる〈京漆器〉三井家と象彦漆器』である。76点に及ぶ象彦西村彦兵衛製の作品が展示され、三井家旧蔵の象彦製漆器と三井家の資料を照合することにより、象彦の製作活動の一端が初めて詳細に明らかにされた。このように象彦は日本の漆工界の全体像を明らかにするために重要でありながら、本格的な象彦に関する研究は2011年の三井記念美術館の展覧会まで待たなければならなかった。その要因として考えられるのは、象彦が屋号を掲げる漆器商であったことだろう。三井記念美術館の学芸員の小林祐子氏は、代々

の当主が漆器プロデューサーの立場をとったことで、個人作家を重要視する近代美術や近代工芸の評価から置き去りにされてきた可能性があることを指摘している¹⁰。

同展以降、京都の近代漆工界の一端を担う存在としての象彦への関心が高まっていった。2014年の京都国立近代美術館における企画展『うるしの近代——京都、「工芸」前夜から』は、それまで纏まって紹介されることのなかった近代京都の動向に焦点を当てた展覧会であった。木村表斎¹¹、富田幸七¹²、迎田秋悦¹³、戸嶋光孚¹⁴などの京都を代表する漆芸家に並び、六代から八代にかけての西村彦兵衛の作品は10点展示された。また、近代以降の漆芸家の研究の中にも、象彦や西村彦兵衛の名を見るようになる。小松大秀氏は「松楓蒔絵文台硯箱と戸嶋光孚¹⁵」において、戸嶋光孚が八代西村彦兵衛を通じて蒔絵職人として作品を制作していた一面を明らかにしている。この他にも泉屋博古館、MOA美術館、京都国立近代美術館、MIHOミュージアム等に西村彦兵衛製の作品の所蔵があり、近年の近代漆工芸を主題とした展覧会においては西村彦兵衛製の作品が展示されることも珍しくなくなった。

先行研究調査を通じて浮上した不明点は、明治時代の隆盛期にあたる六代から八代の作品や製作過程については研究が進んでいるが、創業当時から既に力を持っていたのか、あるいは途中の代で急速に発展したのか、隆盛期に至るまでの発展の推移であった。

2. 西村家所蔵の家伝史料について

次に、西村家所蔵の家伝史料を調査した。象彦こと西村彦兵衛家の菩提寺は蓮光寺¹⁶であり、創業からの九代西村彦兵衛に至るまでの家系図をはじめとして、漆芸作品や絵画史料、古文書を数多く所蔵している。特に、創業家である北本家の三代楠治郎兵衛の肖像（図1）、象彦の由来となったと伝えられる「白象と普賢菩薩」の図（図2）、四代西村彦兵衛の肖像（図3）が特筆すべき史料である。漆芸作品については、詳しくは後述するが、『竹林蒔絵婚礼調度揃』という作品があり、これが唯一江戸時代の西村彦兵衛製と伝わる作品である。また、二



図1 《北本家三代楠治郎兵衛の肖像》（西村家所蔵）



図2 《白象と普賢菩薩の図》（西村家所蔵）



図3 《四代西村彦兵衛の肖像》（西村家所蔵）

代西村彦兵衛が漆器の蒐集家であったことを示す《孔雀蒔絵市松面箱》が所蔵されている。

古文書には「家訓」,「年中行事記」,「蔵道具入所控帳」などの西村家に関する文書や,象牙屋が所在していた下京区中之町に関する文書が数多く残されている。これらの文書は,江戸時代の商家の有り様や町の運営状況をよく伝えるものとして「西村家文書」の名称で149点の複写物が京都市歴史資料館に保管されている。例えば,創業地である中之町の「町式目」と呼ばれる町運営の規則をまとめた資料があり,西村家が江戸時代に朝廷から御用を受けるにとどまらず,有力な商家として地域社会に根ざしてきたことが窺える。また今回の調査において,九代西村彦兵衛が編纂した家系図,創業家や西村家の過去帳,創業家から西村家が家督継承した経緯が読み取れる書簡類等も確認することができ,創業から隆盛期への発展の推移が詳細に把握できる資料となっている。

3. 象彦に関する文献資料について

三番目に,象彦の前身である象牙屋,そして初代から四代の西村彦兵衛の評判や実績に関する記述の文献調査を行なった。文献上の初出としては,江戸時代に発刊された『京都買物独案内』に象牙屋西村彦兵衛の住所と名前を確認することができた。『京都買物独案内』は,地誌類の一つで言えば当時の観光案内書であり,取扱商品ごとに,いろは順で住所と店名や店主が並べてある。『京都買物独案内』は何度か再版されているが,嘉永年版(1851年)の288頁に「塗物道具仕入所」の「寺町綾小路下ル」の「象牙屋彦兵衛」とある¹⁷。また,19年前に遡る天保4年版(1833年)の175頁にも象牙屋の名を見ることができ「小間物諸色手遊人形屋」として「寺町綾小路下ル」の「象牙屋半兵衛」とあり¹⁸,これは象牙屋の別家の一つが別業態で商いを行っていたと推測される。いずれの出版物も,四代西村彦兵衛(1808-1875,継承1832年)の時代にあたる。

上記以外に江戸時代の発刊物から象彦や西村彦兵衛に関する記述を見つけることはできなかったが,明治時代に発刊された幾つかの文献から,初代から四代の西村彦兵衛の評判や実績を確認することができた。重要なものとして『工芸遺芳』,『工芸鏡』,『名家歴訪録』,『尾参宝鑑』の4件を挙げる事ができる。明治時代から見た江戸時代の記述であるという点に留意しながら,これらを検証していきたい。

『工芸遺芳』は,1890年(明治23年)に第19回京都美術博覧会において同名の展覧会が開催され,併せて発刊された書籍である。注目したいのは,『工芸遺芳』の発刊者が三井高保(1850-1922)であることだ。三井高保は,三井総領家である北家の八代三井高福(1808-1885)の四男で,三井室町家の十代を継ぎ,三井銀行の総長となった明治時代の実業家である。三井一族の中でも茶人として知られている。この高保が京都博覧会の社長を務める中,第

19 回京都美術博覧会において編纂されたのが『工芸遺芳』である。『工芸遺芳』が編纂された経緯については、『京都博覧会沿革誌』に以下のように記されている。

四月二五日場内ニ於テ京都ノ故美術工藝家ノ祭典ヲ修ス、蓋シ京都ヲシテ美術ノ淵藪タラシメタルハ皆是レ名工鉅匠ノ賜ニシテ今之ヲ祀ルハ各技各藝ヲシテ奨励ノ意ヲ寓スルナリ、先是京都ノ美術及ビ美術工藝ニ最モ偉績アル各家ノ遺製品ヲ蒐集シテ一堂ニ展陳シ且ツ其傳記ヲ編纂シテ工藝遺芳ト名ク茲ニ其氏名ヲ擧ゲテ其蒐集セル遺品ノ數ヲ併セ掲グ¹⁹

漆工

初代西村彦兵衛 四品²⁰

上記のように、京都の美術工芸において実績ある名家の過去の作品を一堂に展示しつつ、各名家の伝記を纏めたとある。展示においては初代西村彦兵衛の作品4点が展示されたことがわかるが、品名は掲載されていない。伝記においては、次のように西村彦兵衛について記されている。

西村彦兵衛 通稱象彦

名ハ宗忠漆器ヲ造ルニ妙ヲ得テ製スル處ノ器優雅ニシテ頗ル風韻アリ常ニ好ンデ自ラ製シ自ラ之レヲ試ミ用ユルヲ以テ樂トス且謂ク陶器ハ齒牙ヲ損シ木著ハ食物ノ嗅氣ヲ含ム故ニ食器ハ清潔ノ漆器ヲ以テスルニ如カスト其製作中蠟色金蒔繪普賢象ニ乗ルノ偏額ハ一世ノ精巧品ナリシカ偶々菩薩所ニ於テ天明ノ火災ニ烏有ニ歸セリ惜ムヘシ明和年間朱塗大盃三ツ重（大三斗中二斗小一斗入）ヲ製シ店頭ノ商牌トシ人ヲシテ一目漆器店タルヲ識別セシム今尚ホ舗頭ニ出セリ安永二年五月十四日没ス年五十四寺町五條ノ南蓮光寺ニ葬リ法諱ヲ法譽輪周禪定門ト稱ス²¹

文頭にある俗名の「宗忠」、文末にある法諱の「法譽輪周禪定門」は、蓮光寺の西村家の墓石や西村家の過去帳でも確認できることから、初代西村彦兵衛の業績を纏めた文章であることは間違いない。しかし、ここに書かれている出来事の検証を行ったところ、出来事によっては二代や四代の時代に起きた可能性があることが判明した。つまり、『工芸遺芳』の記述は初代西村彦兵衛を讃える伝記であるが、実際は、初代から四代までの西村彦兵衛の業績がひとまとめにされている可能性がある。詳細については後に示す歴代当主の業績の中で述べる。

次に『工芸鏡』は、江戸時代に活躍した諸工芸の名手を網羅的に纏めた1894年（明治27年）に発刊された書籍である。著者の横井時冬は、日本商業史の先駆者であり経営史研究の中で有名な明治時代の人物である。一橋大学の前身である高等商業高校の研究員として日本商業史をまとめていく傍ら、園芸や工芸などの日本文化史研究にも積極的に推し進めていき、江戸時代に特に貿易・殖産などで活躍した商人や職人を一つの模範・モデルとして示すことで、商人・職人の育成に本旨を置いていた。その一環として『工芸鏡』をまとめている²²。この中で西村彦兵衛についても述べられているが、その内容²³は『工芸遺芳』からそのまま引用されていることから本論では割愛する。

『名家歴訪録』は、1890年（明治23年）に発刊された京都の諸工芸の名手に直接インタビューを行った記録集である。著者は、明治時代後半に京都日出新聞の記者や執筆業をして活躍した黒田讓（天外）である。ここには六代西村彦兵衛の自宅を訪れ取材した内容が掲載されており、創業から六代に至る象彦の起源が六代当主本人によって語られていることから、象彦の歴史を知る上で信憑性の高い文献資料となっている。詳細については後に示す歴代当主の業績の中で述べる。

また、1897年（明治30年）に小菅廉らによって編纂された『尾参宝鑑』の第四巻、第二十四章の日本文明史の第七編の「工藝」においては、以下のように記されている。

漆工盛阿彌は天正文祿の頃名譽の技術家として秀吉の寵遇あり同時に篠井秀次あり藤重藤嚴家康に愛せらる 近藤道志 飛来一閑 中村宗哲 山本利兵衛 西村彦兵衛 佐野長寛 橋本市蔵 木村表齋等漆器道の名手を稱す 橋本木村は明治の妙工とす²⁴

『尾参宝鑑』は尾張・三河地方の歴史や地理、産業などをまとめた文献であり、その中に日本文明史が編纂されているのだが、江戸時代後期の漆工芸の名手として、近藤道志²⁵、飛来一閑²⁶、中村宗哲、山本利兵衛²⁷、佐野長寛と並んで、西村彦兵衛の名が記されている。ここから、明治時代における京都以外の地域での四代の評判を読み取ることができる。

このように、江戸時代における象彦に関する文献は『京都買物独案内』のみに限られるが、『京羽二重』を皮切りに京都の蒔絵師の名が通るようになった後、西村彦兵衛の名が見られるようになったことは注目すべき点である。他の京都の蒔絵師と比べ、突如として文献上に出現する様子は、幕末の四代から明治初期の六代にかけての、急速な評価の高まりに連動すると考えられるだろう。そして、明治時代に入ってから、三井家との交流が深まり評判が高まる中、三井高保が編纂した『工芸遺芳』、そして日本経営史の研究家の横井時冬による『工芸鏡』に引用され、京の蒔絵師や塗師たちと肩を並べるように、近世漆工芸史上に名を連ねるようになる。

4. 創業家から西村家への家督継承

上述のように、先行研究と西村家の家伝史料及び明治期の文献等を精査したところ、これまで使用されてきた象彦の歴史にいくつかの齟齬が見られたため、次に1661年（寛文元年）の象牙屋創業から、初代西村彦兵衛による家督継承、そして幕末の四代西村彦兵衛に至るまでを詳細にまとめる。

象牙屋の創業者である安井七兵衛（生年未詳-1692）は、もともと大阪平野町の長崎唐物交易株を持つ唐物商であった。創業地とされる下京区寺町綾之小路中之町の南西角は、現在の京都市の中心街に位置し、四条通より少し南に下がった寺町通沿いにあるが、中之町は早くから発展した地区であることがわかっている。中之町を含むこの地域は、幕末に整備された開智小学校の学区に含まれ、北に四条通、南に松原通、東に寺町通、西に富小路通によって限られた区域で、寺町通は東側の寺院街も含んでいる²⁸。同区は江戸時代から続く町組という地域住民による自警集団が基礎となっており、『京雀』や『雍州府志』などの地誌類によると、この界隈の町組は、刀剣、扇の骨、荒物類の製造販売に特色のある商工業地域としての性格を持っていた。つまり、商工業者の街と寺院街とが並存し、ともに発展していった地域だったのである²⁹。その中でも中之町は、1685年（貞享2年）発刊の地誌『京羽二重』によれば、裏辻筑後という著名な筆師が居住したという記載があり、やはり商工業者が多く住む町であったことがわかる³⁰。

次に、象牙屋を譲り受けたのが楠治兵衛（生年未詳-1714）である。楠治兵衛には二人の子供がおり、象牙屋の店を寺町通の南北に分け、南本家を二代楠治兵衛（1683-1744）が、北本家を初代楠三郎兵衛³¹（1689-1716）が受け継ぐことになる。南本家は唐物道具商として営業し、北本家は唐物道具商と漆器道具専門店を兼業した。この北本家に1732年（享保17年）に12歳で奉公に入ったのが、初代西村彦兵衛である。1756年（宝暦6年）に北本家から認められ別家し、西村彦兵衛と名乗り始める。

その後、南北楠家は絶家の道を辿ることになる。北本家は四代にあたる楠治郎兵衛（1750-1788）で途絶えたのち、相続すべき筆頭人がない状態となり、本家の家督を別家集団である「内和中」に引き渡すという書簡（図4）が西村家の古文書の中に確認されている。この書簡の宛先は、象牙屋八兵衛・清兵衛・彦兵衛・世兵衛・庄兵衛とあり、この五家が当時の別家集団「内和中」と考えられる。この書簡は1814年（文化11年）のものであり、西村彦兵衛は既に三代目の時代になっている。尚、西村家には1781年（天明元年）に作成された『内和中式目』（図5）という史料が所蔵されており、象牙屋における本家・別家の関係が、他業種の商家とは異なっていることが分かっている。文頭には「本家有ての別家，別家有ての本家なれば…」と始まり、本家・別家間の共存共栄の関係を保つための理念と、多数の別家が



図4 本家の家督を「内和中」に引き渡す書簡(西村家所蔵)

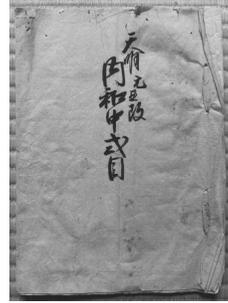


図5 『内和中式目』(西村家所蔵)

共存し得た背景を見ることができる。

ここにおいて推測される西村家が家督を継承するに至った経緯は、北本家が続く中、西村家は別家集団「内和中」の一つとして存在し、次第に別家筆頭となり、本家が絶家した後に、やがては唯一事業を継承することになったと考えられる。現在、西村家の菩提寺蓮光寺には、歴代西村彦兵衛以外の墓が多数あり、創業家楠家の墓の他、「内和中」の清兵衛の名も確認することができる。つまり西村彦兵衛家は、別家として始業した1756年(宝暦6年)を初代とし、象牙屋本家を継承し、今も主家別家一同を守り続けている形となっている。

ここで得られた最たる知見としては、別家の一つとして本家を支える中で次第に家業を継承したことから、世襲制ではなく組織的に事業を継承し発展していった姿である。

5. 幕末までの歴代西村彦兵衛の経歴と業績

5-1. 初代(1720-1773, 継承1756年)

初代西村彦兵衛は、生まれは滋賀県野洲郡小浜村の出身で、西村典左衛門の三男、幼名を灌次郎といい、俗名を宗忠と称した。象牙屋の家督継承の経緯については先に述べた通りである。前掲の『工芸遺芳』の文頭には、「漆器ヲ造ルニ妙ヲ得テ製スル處ノ器優雅ニシテ頗ル風韻アリ常ニ好ンデ自ラ静シ自ラ之レヲ試ミ用ユルヲ以テ楽トス」とあり、初代は漆器の技法に優れ、優雅にして風韻があったと評されていた様子が窺える。「其製作中蠟色金蒔繪普賢象ニ乗ルノ偏額ハ一世ノ精巧品ナリシカ其菩薩所ニ於テ天明ノ火災ニ烏有ニ歸セリ惜ムヘシ」とあり、菩提寺に掲げた白象に乗った普賢菩薩の呂色金蒔絵による偏額が素晴らしい出来であったというが、象牙屋の所在した中之町は天明の大火の消失範囲に含まれ、象牙屋が大火に見舞われたことは間違いなく、残念ながらこの偏額は現存しない。しかし、原図と伝えられる「白象と普賢菩薩」の絵画史料が今も西村家に所蔵されている(図2)。しかし、この文章には矛盾した点がある。天明の大火は、二代の時代に起きた出来事であり、初代に関する記述の中に二代の時代の出来事が混在していることになる。つまり、消失した偏額を製作し

たのは二代である可能性があり、初代から二代にかけて段々と京都での評判が高まっていったとも考えられる。

「明和年間朱塗大盃三ツ重（大三斗中二斗小一斗入）ヲ製シ店頭ノ商牌トシ人ヲシテ一日漆器店タル」とあるが、明和年間（1764-1772）は初代西村彦兵衛の晩年にあたり、この頃から朱塗りの大中小の三つの大きな盃を商標として店頭に配していたことがわかる。これと同等の大きさの朱塗三ツ重の大盃が現在も西村家に伝えられている。しかしながら、六代西村彦兵衛への取材内容が掲載されている『名家歴訪録』（黒田譲 著、1899年）には、朱塗三ツ重の大盃は四代西村彦兵衛の時代にこしらえたとあり、また『府県漆器沿革漆工伝統誌』（農商務省 編、1886年）にも同様の記載があることから、四代の時代での製作が妥当と考えられる。『名家歴訪録』の六代への取材内容については、後に詳しく述べる。初代は1773年（安永2年）に54歳で没し、諱は「法譽輪岡禪正門」である。

5-2. 二代（1744-1803, 継承 1773年）

二代西村彦兵衛は初代の兄の五男であり、初代の長女が夭逝したため、象牙屋を継いだ。俗名は行宣という。二代は初代と共に漆芸の技法に通じ、蒐集家でもあったという。現在、西村家には二代が漆器の蒐集家であったことを示す《孔雀蒔絵市松面箱》が所蔵されている。また現当主の十代へ尋ねたところ、二代の時代より「家訓」を編纂し始め、三代を経て、四代の時代にもう一つの家訓である「年中行事記」が完成したということである。「家訓」とは象牙屋における経営理念がまとめられたもので、日本の経営史に寄与するものとして知られている。「年中行事記」は、西村家の一年の間に行われるべき行事が事細かに記されており、当時の商家の暮らしがつぶさに分かる史料となっている。二代は1803年（享和3年）に60歳で没し、諱は「真譽法輪禪正門」である。

5-3. 三代（1774-1832, 継承 1803年）

三代西村彦兵衛は、俗名を延成という。特に蒔絵技術に秀でていて、御所の御用達を命ぜられた功績により、朝廷から蒔絵司の称号を授けられたと伝えられている。1832年（天保3年）に59歳で没し、諱は「耕譽架苑居士」である。

5-4. 四代（1808-1875, 継承 1832年）

三代の男子がいずれも夭逝したため、三代の三女きぬの養子として、伏見の山本（塩屋）辰右衛門より入家したのが四代西村彦兵衛にあたる。俗名を公通という。三代と並び、蒔絵の技法に通じ、仙洞御所の御用商人になったと伝わっている。四代に対する評判については、

『名家歴訪録』において、六代による四代の業績に関する取材内容³²が掲載されているが、「就中四代目彦兵衛と申すが尤も塗物といふことに骨折りまして非常に精良の品を出し、殊に杯類を多く製しましたので只今もって店前に飾り商標と致し居りまする二斗八升、二斗、一斗の三重ねの朱塗の大杯は、其の時にこしらへましたのでムいます。」とあり、最も塗物に優れ、特に杯類を多く製作したとある。杯類について現当主である十代に尋ねたところ、食器としての盃ではなく絢爛な蒔絵を施した贈答品であったとのことである。そして御所漆器の御用を勤め、また他の地域より次々と注文が入ったとあり、四代が家名を大きく高め中興を成したことがわかる。しかし間も無く時代は幕末期に入り、依頼元であった公家や諸藩からの需要が減り、京都の漆工界は困難な時代へと進んでいくことになる。

象牙屋は1864年（元治元年）の蛤御門の変で店舗が焼失するも再建するなど、困難に直面しつつも家業を繋いでいく。再建した店舗の図画（図6）が西村家には残されており、添書きには、「元治元年に蛤御門の変で焼失した店舗を新築した」と記されている。そこには店舗の全容が記されており、象牙屋の額が掲げられ、店頭に朱塗三ツ重の大盃が並べられ、

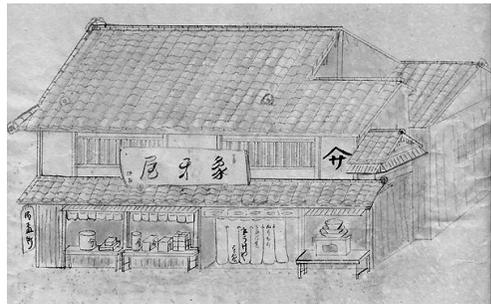


図6 再建した店舗の図画（西村家所蔵）

盃の「サ」に山冠を配した「ヤマサ」の屋号が二階部分に描かれている。幕末までは、象牙屋という名とヤマサという屋号を以て漆器商を展開していたことが分かる。『名家歴訪録』には良質な蒔絵も焼いて金だけを集めて売り払うような当時の悲惨な状況が描写されているが、この図画から読み取れるのは、このような危機的な状況下でも象牙屋は店舗を新築再建できるそれなりの財力があったということであり、没落することなく更なる発展へと繋がっていきけるだけの漆器商としての規模が窺える。そして、明治時代以降は、店名を象彦に変え、美的な料紙文箱、硯箱、棚物などを多く製作するようになり、西村彦兵衛の名を作品や箱に載せ始めるようになる。四代は1875年（明治8年）に68歳で没し、諱は「隨譽教順公通居士」である。

最後に四代の業績として、江戸時代の象彦製作と伝わる《竹林蒔絵婚礼調度揃》を説明する。あわせて30点の調度とその付属品で構成される、竹林の蒔絵が施された婚礼調度類である。30種の内訳は以下の通り。

「お湯椀」「みだれ箱」「わたしかね箱」「煙草盆」「歌かるた笥」「香取香炉」「菓子箆笥」「貝桶」「貝合せ」「鏡」「琴柱箱」「御鏡立」「御所文笥」「四種香盤」「耳だらい」「手紙笥」「手箱」「朱喰籠」「十種香箱」「双六」「大文笥」「茶台」「銚子」「沈わり箱」「入子硯蓋」

「杯台」「盃」「房付梅形台」「銘々菓子盆」「鬢台（1）」「鬢台（2）」

「煙草盆」（図7）に付属する灰道具箱や硯箱（図7-1）には、光琳鶴の丸の紋の蒔絵（図7-2）が配されており、この作品の依頼者に由来するものと考えられるが、謂れは不明である。



図7 《竹林蒔絵煙草盆》（西村家所蔵）



図7-1 《竹林蒔絵煙草盆》と付属品類



図7-2 《竹林蒔絵煙草盆》に付された光琳鶴の丸の紋

文様や技法について述べると、平蒔絵による竹林文様が「沈わり筥」以外に配されている。金の竹林の中に青金の竹を交え、竹林全体に金の微粉を淡く蒔き霞がかかったように仕上げ、竹が青々と生い茂る様子を風合いよく描いている。伝統的な竹の意匠とは異なる竹林の近景図を描くところに、意匠の工夫が見て取れる。調度類全体の意匠を見渡すと、黒地に竹林の蒔絵を施したものが大半であるが、中には、梨地に竹林蒔絵を施した伝統的な様式の「大文筥」や、「朱喰籠」のように表面に朱の刷毛目塗りに黒漆で竹林を描き、蓋を開けると内側に黒漆に金の竹林が現れるといった趣向を凝らしたもので、幅広く展開されている。また、箱物から高杯のような円形の調度に至るまで、様々な角度から各面の竹林が響き合うように計算されていることが窺え、洒脱で洗練された意匠がすべての調度に貫き通されている。更には、薄造りの生地、平滑な塗面、かどの切立の際立ちに、職人の優れた技量を見ることができる。このような調度類全体の有り様から、漆器プロデューサーとしての四代の手腕を伺うことができる。

おわりに

本論では創業から幕末までの象彦の発展の歴史と、四代までの西村彦兵衛の業績を、先行研究調査と西村家所蔵の家伝史料及び文献調査を通して可能な限り明らかにした。今回の調査により、江戸時代の作品と推定できるものがほとんど残っていないことが判明した。これは、象牙屋がプロデューサーとして漆器製作を主導してきたことから、製品に名を残す習慣がなかったことが原因と考えられる。個人としてではなく、あくまで漆器商として発展してきたことを体現しているといえる。そして、四代こそが象彦の中興の祖であり、幕末期に他の地域から注文を受けるほどに象牙屋の名を知らしめ、明治維新の混乱期を乗り越え更なる

発展へ繋がったことが判明した。そして、四代までの象牙屋の発展に寄与したのは、歴代当主の実力や継承力だけではなかった。「家訓」や「内和中式目」から、当主家内外の関係を保ち続けるための企業努力が見られ、中之町の「町式目」から、有力な商家として地域社会に根ざしてきたことが判明した。つまり、京という地域に根ざした組織的な漆器製作を長年続けてきたことが、ひいては近世における京の漆器業の発展へ繋がったと考えられる。

最後になりましたが、資料調査において多大なるご協力をいただきました、株式会社象彦の十代西村彦兵衛、西村毅様に心より感謝の意を表します。

註

- 1 並木誠士、清水愛子、青木美保子、山田由希代編『京都伝統工芸の近代』思文閣出版、2012年、15頁。
- 2 『蒔絵百花繚乱 — 江戸時代の名工とその系譜』MIHO MUSEUM、2023年、7頁。
- 3 中村宗哲（1617-95）。京都の名人で名を玄弼、通称八郎兵衛と称した。号名は漆翁・勇齋・方寸齋。塗師中村家の祖。点茶を好んで藤村好軒と親交を結び、代々千家の塗師となった。現在、当代十三代まで続いている。
- 4 近藤道恵（生没年不詳）。京都手洗ノ水町に住んだ江戸時代の塗師で、古田織部に引き立てられ、その作品が小堀遠州に認められたという。いじいじ塗りとも呼ばれる石地塗を考案し、子の道志が開花させたと伝わる。
- 5 永田友治。正徳・享保（1711-1736）年間頃に京都室町に住んでいた蒔絵師。光琳の風をしたい、蒔絵の名工とされた。高蒔絵の下蒔に錫粉を用いることを工夫し、後世「友治上げ」と称して広く行われている。生存の時期については、文化・文政（1804-30）頃という説もある。
- 6 塩見政誠。享保（1716-1736）年間頃の京都の蒔絵師。通称小兵衛といい、精巧な研出蒔絵を得意とする他、風流洒落な墨蒔絵や木地蒔絵にも長じた。特に研出蒔絵は「塩見蒔絵」と称された。江戸四谷に住んだともいわれる。
- 7 佐野長寛（1791-1863）。京都に生まれ、通称長浜屋治助といった。祖先は高麗から帰化した名工張寛で、彼はその5世の孫と言われる。22歳の時に漆技研究のため各地を遊歴し、のち江戸に来て研鑽を重ね、1822年（文政5年）に帰京して開業した。特に黒漆塗りを得意としたといわれる、没年には1856年（安政3年）の説もある。
- 8 『うるしの近代 京都、「工芸」前夜から』京都国立近代美術館、2014年、260頁。
- 9 足立正男「象彦家の歴史と経営哲学」（『京の伝統と文様 8 京漆器／象彦』美乃美、33-89頁）1984年。
- 10 『特別展 華麗なる〈京漆器〉三井家と象彦漆器』三井記念美術館、2011年、6頁。
- 11 木村表齋（1818-85）。近江高島郡小川村に生まれ、早くより京都に出て塗師柴田藤兵衛の弟子となった。作品は飲食器が多く、真塗を得意とした。根来塗や蒔絵にも巧みで、佐野長寛以来の名工といわれた。
- 12 富田幸七（1854-1910）。京都出身の蒔絵師。旧姓奥村光一。山本利兵衛に蒔絵を、岸光景に絵画意匠を師事する。1899年（明治32年）京都執行商工組合副組長、京都美校議員、同34年美校教諭。同37年金閣寺修理における漆工工事監督。明治京都漆工界の功勞者。

- 13 迎田秋悦 (1881-1933)。大阪の蒔絵師嘉兵衛の長男。本名嘉一郎。京都に移住し、三宅呉焼に絵画を学ぶ。1906年(明治39年)に中沢岩太、浅井忠の指導で杉林古香、戸島光孚らと共に「京漆園」結成、翌年には神坂雪佳の指導による「佳美会」結成参画。1925年(大正14年)パリ万博金牌ほか内外展覧会で活躍、晩年は帝展審査員など。大正から昭和前期の京都漆工界の実力者。
- 14 戸島光孚 (1882-1956)。本名は弥一郎。光阿弥と号する。美術工芸学校絵画科を卒業、竹内栖鳳に日本画を学ぶ。鯉を得意としその蒔絵作品も多い。1897年(明治30年)頃より新古美術品展、内国勸業博覧等へ出品、受賞を重ね、迎田秋悦、杉林古香らと共に「京漆園」を結成。1925年(大正14年)のパリ万博装飾博では名誉賞を受賞。1936年(昭和11年)には帝展に入選。
- 15 小松大秀「松楓蒔絵文台硯箱と戸島光孚」(『学習院史料館紀要』第18号)2012年3月、「続・松楓蒔絵文台硯箱と戸島光孚」(『学習院史料館紀要』第19号)2013年3月。
- 16 京都市下京区本塩竈町富小路六条上ルに位置する浄土宗鎮西派の知恩院末寺。本尊は負別阿弥陀如来。墓地の西側に、楠家の墓跡群と初代西村彦兵衛の墓跡、北西角に五代以降の西村彦兵衛の墓跡がある。創建や変遷の詳細は不明であるが、平安時代の1175年に創建されたともいう。安土・桃山時代の1591年、豊臣秀吉の命により現在地に移転し、「蓮光寺」に改め、浄土宗に改めたという。
- 17『史料 京都の歴史 第12巻 下京区』京都市、1981年、777頁。
- 18『商人買物独案内 下』近世風俗研究会、1962年、175頁。
- 19『京都博覧会沿革誌』京都博覧協会、1903年、262-263頁。
- 20 同上、266頁。
- 21 三井高保著『工芸遺芳』、1890年、32-33頁。
- 22 夏目琢史「横井時冬論——商人・職人を中心とした、もうひとつの「国史」研究の可能性——」(『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第3号)、2015年。
- 23 横井時冬著『工芸鏡卷二』六合館、1894年、25-26頁。
- 24 小菅廉等編『尾参宝鑑』東壁堂他、1897年、58頁。
- 25 近藤道志(生没年不詳)。道恵の子。江戸時代前期の塗師。京都烏丸蛸薬師に住む石地塗の名手として名高い。1646年(正保3年)の小堀遠州に認められ、やがて京都の茶道具頭のような地位を占めるなどし、遠州の知遇を得ていたことが知れる。全盛期は元禄・宝永(1688-1711)年間頃と見られる。
- 26 飛来一閑(1578-1657)。元中国明の人で、寛永(1624-1644)年間に帰化し、西湖飛来峰下の出生地であるところから飛来を姓とした。号を朝雪斎、金剛山人、蝶々子などとも称した。一閑張を始め、茶人千宗旦にその作を愛されて世に知られた。代々一閑張を伝え、現在十六代に及んでいる。
- 27 山本利兵衛(1688-1766)。名を武継といい丹波桑田郡の人。宝永(1704-1711)年間頃、京都に出て、吉文字屋某について髹漆法を学び、1714年(正徳4年)に工場を設けて開業した。1746年(延享3年)には桃園天皇即位の際に調度の蒔絵を命ぜられ、以後代々利兵衛を名乗り、禁中諸調度の御用を務めた。五代目以降は未詳である。
- 28『京都 学校物語』京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館、2017年、17-23頁。
- 29『史料 京都の歴史 第12巻 下京区』京都市、1981年、172頁。
- 30『新修 京都叢書 第二巻』新修京都叢書刊行会、1969年、217頁。
- 31 第66回意匠学会大会の研究発表では北本家初代を楠治郎兵衛としていたが、後の西村家の過去帳の継続調査により楠三郎兵衛であることが分かり、本論文は記述を改めている。
- 32 黒田讓著『名家歴訪録 中編』1901年、245-247頁。

The Development of Lacquerware in Kyoto and Zohiko: Focusing on the Achievements of Zogeya and Nishimura Hikobei I to IV During the Edo Period

HOSHINO, Yoko

Zohiko is known as a traditional lacquerware company that has been based in Kyoto for over 350 years. This study aims to clarify the position of Zohiko in the history of Japanese lacquerware by exploring the achievements of Nishimura Hikobei and their works. Specifically, this study focuses on the period from the founding of Zogeya in 1661 (the predecessor of Zohiko) to the time of Nishimura Hikobei IV (1808–1875), in the Edo period.

When Zogeya was founded in 1661, its founder, Yasui Shichibei, started a shop selling Chinese goods, which he named Zogeya. In 1756, Nishimura Hikobei I (1720–1773) opened a lacquerware shop as a branch of the Zogeya company. Over time, the Nishimura family expanded the business by catering to an upper-class clientele. By the time of Nishimura Hikobei IV (1808–1875), the lacquerware shop had become the representative branch of the Zogeya company.

The study reveals that there are few surviving works from Zogeya or Nishimura Hikobei during the Edo period. This fact suggests that Hikobei IV did not follow the tradition of signing works, as he operated not as an artist but as a supervisor in the lacquerware industry, where division of labor was common.

Moreover, the documents such as the Kakun and Uchiwachu Shikimoku reflect the domestic structured efforts to maintain internal order and external relations, while the Machishikimoku of Nakanocho attests to the status as a prominent local merchant house. These records indicate that sustained, organized lacquerware production rooted in Kyoto, contributed significantly to the development of Lacquerware industry in the Edo period.